

主として理工学館における 上手な案内，要領のよい視察

The Value of Individual Guided Tours and Visitors
Precise Search for Information in Museums
of Science and Technology

平 沢 康 男*
Yasuo HIRASAWA

博物館運営で日頃の研究は欠くことのできないものであるが，調査もまた重要なものである。調査はアンケート，具体的事項についての問い合わせも行われるが，百聞は一見にしかずで，担当者が現地へおもむくのが最も効果が高い。親密な人間関係がえられれば，手紙回答では書いてくれないノウハウ的なことも「口をすべらせて」くれるだろうし，それでなくても直接の調査目的以外にもいろいろの発見があり，得るところが大きい。

当館にもいろいろな方が視察に来られる。その方々も多種多様で，「一地方に博物館を設置したい」意向で，大所高所から検討しようという自治体の長や議会筋の方もあれば，「このテーマについて……」と1～2の展示について来られる現場の学芸職員の方もいる。

これら視察は1か所のみという場合は少なく，2～3の関連施設を組み合わせてまわる場合が多いので，その多くはスケジュール上多忙であるから効率的であるのが望ましいし，受け入れ側も最大限に満足していただく配慮をするのは当然である。そこで常々見聞きしていることをまとめてみた次第である。

1. 視察する立場

一つの施設を公的に見学するには，例え1フロアへのみの館でも最低1時間はとるのが礼儀であろう。しかし中には予め心づもりした予定を変更し，時間をさいてわざわざ立寄られる熱心な方も多いので一概にはいえなかもしれないが…。予めその館までの交通事情，施設の規模，展示内容を可能な限りしらべておくとよい。博物館の案内書にはおよその見学時間が記されている。

間々最初に資料を受けると早々に「他への用事がある…」と辞され，きいてみると観光地行きのコースであったというカラ出張まがいのケースで（若い学芸職員です）一同唖然としたというようなこともあるが，これは論外。大多数の方々，特に学芸担当や，「これから新設する」という意気に燃える準備室の方々は非常に熱心で，時には身銭を切って付近の関連館（トヨタ会館や岐阜市立児童科学館）へ出向かれるから念のため。

さて，地域・都市の文化水準は「どんな博物館があるか」でおよその見当がつくというが，その博物館の社会的貢献度・学術的ポテンシャルは，敷地・建坪・学芸職員を含む職員の数，それに展示の数や年間入館者の数もさることながら，「管理者はどなたか？ 学芸スタッフはどんな方がおられて，どんな博物館活動をしておられるか？」で評価されるべきであろう。敷地や建坪など二次三次の次で，むしろ「あの人がいるから…。こんな苦心をしているから…」ということの方を重視する。博物館の規模は一般的にいえば，もちろん大きいに越したことはない。大型予算の中でやりくりするのであるから，コレクション・展示は立派である。しかしその反面，小規模館は小廻りがきき，情勢に応じて小まめに運用できるし，館長と学芸職員との組織的距離が近く，たいいていことはその範囲で決定できるメリットがあり，大規模館のように学芸職員のイメージが経理も含めて何層ものフィルターを通して簿められ修正され，結果としては一般化して平凡な展示になりかねない恐れが少ない。従って精一杯のものがみられる利点がある。

余談であるが，アメリカのプラネタリウムでは数10台

* ひらさわ やすお
市立名古屋科学館
Nagoya Municipal Science Museum

原稿受理：1979年12月17日
連絡先（勤）
〒460 名古屋市中区栄2-17-22
（電話）052・201・4486（代）

という補助投影機を駆使してダイナミックな投影をしている。工作室へまわると控えの投影機を次から次へと改造して有効に運用していて、そこには日本の特に公的機関にみられる“備品”的な考え方はうすいようである

(往時の日本と米国の兵器に対する考え方と似ている) 同じ日本国内の公的機関の博物館でも、いわゆる大規模館では“備品”的な考え方が強く、展示品の改造・改善はいろいろな制約があるように思う。特に原形を損うことは嫌うし、その費用も製作時の費目以外のものによると経理上にもいろいろ不都合が生じるのは事実である。なにしろ大勢の組織で運営しているのだから、流れを乱すと仲々面倒であちこちに引っかかりができる。

これに反して、いわゆる小規模館では、備品的な考えを踏まえつつも、その展示の寿命のある限り、職員の創意によってよりよく維持・改善していこうとする姿勢が強いように思う。…従って職員が消耗器材としてポツポツ購入したものが、いつのまにか立派な員数外備品としてでき上るのではないだろうか？(これは冗談)

“姿勢”という、何かの機会に他館を訪問すると、いろいろとその館の活動の姿勢が伺われておもしろい。

“学芸員老頭児の三羽ガラス”の一人と目して、常々尊敬している関東のY氏は、他所を訪問する場合は、公的なもの以外は入口で切符を買い、一般人のような振りでみてまわり、展示室職員にいろいろ質問してみると、専門知識・見学者への応待サービスなどソフトの面が赤裸々にわかるからである。

…私共の方はチャンと人相書き入りの手配がしてあって、それだけでなくどこか一般人とは違う微に入った質問で感づいてネットにかかるしくみになっているが、展示室の女子職員も大分入れかわったから「Y先生の顔を知らない博物館屋はモグリとみられても仕方ないよ」と達してあるにも拘らず、近頃は洩れることもあるらしい。

私は少々別の意味もあって、文書でお願いした公的訪問以外は、なるべく窓口で切符を買って入っている。

一つは前記Y先生と同じ理由で、運営のソフト面を知りたいからである。今一つの理由は、私的訪問といっても身元を明かせれば責任者の方が出てこられて挨拶して下さるのが例であり、不時の訪問で何かとご迷惑がかかるであろうこと、それに展示をじっくり拝見したいからである。(もちろん後刻事務室へ挨拶に伺うが…)

展示室を案内されるメリットは、案内側からいえば、その館でいちばんみてもらいたいところを強調したいであろうし、故障・老朽などであまりみせたくないところは適宜ネグることもできる。もちろん館側としてはあま

り触れてほしくない向もあるだろうが、自館の長所と同時に「この館の建物・設備・展示・ソフト面にはどんな弱点があり、管理上不具合があるか」を十分にみてもらう…これが本当の熱心な視察に対する対応と思う。

学芸職員がいくら努力しても、すでにでき上った建物は今更なんともならないし、管理体制だってそうそう気安く変更できるものでないから不具合は不具合として伝受するのも親切の一つであろう。

2. 案内する側

私の場合、他から視察のある場合、公的に知らされている場合は2〜3の印刷物(概要、入館案内など)を一括用意しておく。そして事前の依頼でも不意の来館の場合でも、すぐに「時間のご都合と主な目的は？」と切り出すことにしている。半日は半日なりに、1時間は1時間なりに最も満足していただける応待の方法がある。

半日も時間を割いてゆっくりみていただける際は、5分や10分は館の現況を大づかみに把握していただいた上で、希望によっては案内をつけるなり、自由にみていただくなりもよいであろう。しかし「1時間しかない」という場合はそれなりに効率的にせねばならない。“後でみればわかる 事業概要などを基に“他人にとってはどうでもよさそうな”そもそもの設立の主旨から始まって、今までに実施した事業の詳細や月々の入館者数まで延々とやられたら(そのたいていは書いてあることの繰返しである)訪問した側はたまらないであろう。…しかしよくあることである。話題はそれが研究発表会などで「10分間」と制限されているに拘わらず、「科学クラブ設立の主旨から始まって目的などを紹介し、どんな評価を受けていて〇〇賞と〇〇賞を受けた…」とやっている内に時間の大半を喰ってしまう例がみられる。設立の目的などは比べてみれば大半は似たような共通項のある抽象的なものであり、触れるにしてもサラッとやるに限る。

前述のように1時間もあれば駆足ながら相当な規模な館でも目的のところは要領よく案内できるものである。

急ぎの向には資料を一括して渡し、「後で汽車の中でもお読み下さい」でもよいし、必要最小限のことは展示室への案内の途中、歩きながらでもできる。

割合効果的で礼を失しない方法は、展示室のスタート点まで案内し、ポイントだけ話して先方の時間的ペースで廻ってもらい、時間があれば後で質問を受ける方法であろう。上手な案内、そして要領よく案内され、話上手、きき上手となるのも学芸職員のテクニックの内である。